

東日本支部だより

2017年3月5日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

■定例研究会のお知らせ■

今後の例会予定

3月以降は下記の日程で定例研究会を開催する予定です。ふるってのご参加、お待ちしております。

第95回 3月18日(土) 於:大正大学

卒・修論発表 *詳細は下記をご覧ください。

第96回 4月1日(土) 於:お茶の水女子大学

卒・修論発表 *詳細は下記・次頁をご覧ください。

第97回 6月3日(土) 於:国際基督教大学 博論発表

第98回 7月1日(土) 於:東京音楽大学 研究発表ほか

第99回 12月2日(土) 於:東京大学 研究発表ほか

※発表申し込み多数の場合は9月に特別例会を追加開催する可能性もあります。

2. 藤原通憲と音楽 —院近臣としての立場に着目して—

神崎 夏希 (東京藝術大学)

3. 明治初期における名古屋の芸能の特色について —芝居小屋の上演記録調査を中心に—

米本 有里 (東京藝術大学)

○修士論文発表(その1)

4. 新宿西口商店街「新宿西口思い出横丁」で聴かれる音についての考察 —人と場所との関係から—

横畠 怜子 (お茶の水女子大学大学院)

5. 映画音楽におけるクィアの読解 —『ロープ』(1948)のピアノシーンを通して—

横山 洸 (お茶の水女子大学大学院)

6. 7 世芳村伊十郎の録音全集と長唄の「近代」 —「文化」を語る正当性をめぐって—

永嶋 宗 (東京大学大学院)

◆東日本支部 第95回定例研究会

時 2017年3月18日(土) 午後2時~4時30分

所 大正大学 552 教室 (5号館5階)

(都営地下鉄三田線 西巢鴨駅下車 徒歩2分、JR 埼京線 板橋駅東口下車 徒歩10分、都電荒川線 庚申塚駅または新庚申塚駅下車 徒歩7分)

○卒業論文発表(その1)

1. 世界の音楽を教材化すること —音楽科における「教材」概念の再考—

平野 悠佳 (東京学芸大学)

司会 金光 真理子 (横浜国立大学)

◆東日本支部 第96回定例研究会

時 2017年4月1日(土) 午後2時~4時40分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟 2号館 102 室

(東京外口丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分、東京外口有楽町線 護国寺駅下車 徒歩9分)

※ご来校の際には身分証明書をお持ちの上、正門をご利用ください。

○卒業論文発表(その2)

1. 中部ジャワのワヤン・クリツにみる現代性 ―過去20年の録音の分析を通して―
岸 美咲 (東京藝術大学)
2. 沖縄市のライブハウスとその特質 ―沖縄振興特別推進交付金における地域活性化と観光誘致―
澤田 聖也 (国立音楽大学)

○修士論文発表(その2)

3. うた澤節の音楽様式研究 ―前弾を中心に―
木岡 史明 (東京藝術大学大学院)
4. 覚意の『博士指口伝事』の研究 ―五音博士の源流を探る―
デュラン, ステファン・アイソル (東京藝術大学大学院)
5. 能の「平ノリ」地拍子における実践研究 ―現行運用と拍の伸縮性を中心に―
坂東 愛子 (東京藝術大学大学院)
6. 東京混声合唱団における委嘱活動の位置づけとその変容 ―委嘱作品期・新世代期を中心に―
武藤 聡里 (お茶の水女子大学大学院)

司会 野川 美穂子 (東京藝術大学)

※例年、支部だより6月号に掲載しておりました卒論・修論の傍聴記は、執筆者調整の困難など諸般の事情で、昨年度より修論のみを対象に掲載しております。会員各位のご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

■定例研究会の報告■

◆東日本支部 第93回定例研究会

時 2016年12月17日(土) 午後2時～4時45分

所 大正大学552教室(5号館5階)

司会 奥山 けい子 (東京成徳大学)

○博士論文発表

1. 山口巖の生涯 ―箏曲界に与えた影響とその業績―
福田 恭子 (東京藝術大学)

(発表要旨)

京都の生田流の演奏家・作曲家である山口巖(菊次郎)(1867-1937)は、箏曲界でその名を知る人は少ない。本研究では、山口の生涯を明らかにするとともに、邦楽界で重要な役割を果たし、多くの影響を与えた業績を集成した。

山口は、1879年に京都盲啞院が音曲教育を創始した際に、第1期生として教育を受けた生徒であった。京都府立盲学校資料室の「京盲文書」より、盲啞院において優秀な成績を修め、長年音曲教育に従事し、盲啞院の活動に尽力していたことが明らかとなった。また、「巾柱(蔭柱)」の開発や、調子笛の一種である「四穴」の改良に熱心に取り組み、盲啞院では盲人のための点字楽譜を発案し、箏曲界において価値あるものを残した。東京では、箏曲楽譜の校閲者となり、ラジオ放送でも活躍し、名演奏家との交流も深かったため、京都の古典を伝承し続ける山口の存在は大きかったと考える。

1911年には、東京音楽学校の邦楽調査掛を嘱託され、生田流箏曲の講師となり、邦楽演奏会に出演するとともに、天皇即位を奉祝する《御代万歳》《聖の御代》を作曲した。また、『三曲』の山口の記事には、箏の弾き方を中心として、箏曲の歴史に関する記事などが多く残されており、箏曲人生にかけた意思や生涯の研究の成果が表れていた。山口は、自身の楽曲と手付け作品を合わせて46曲残した。箏・

三絃の手付け作品の分析により、いずれも様々な手法や奏法を装飾として取り入れ、複雑な節付けを用いた、技巧的な作品が多いことがわかった。この作曲技術は、山口の日々の芸への並大抵でない鍛錬により得られた能力であったと考える。

生涯にわたり、偉業を残してきた先人たちへの敬意を大事にしていた山口は、古典を保存するという信念をもち、後世に伝える努力を続けた人物であることがわかった。本研究によって、山口が箏曲教授に献身し、芸に身を投じながらも研究に精進したことが、多くの業績を残すことに至ったのではないかと示した。

(傍聴記：福田 千絵)

福田恭子氏の発表は、明治から昭和初年にかけて京都を中心に活動した箏曲家山口巖の生涯に関する詳細な研究発表であった。限られた資料を丹念に読み込むことにより、明治維新後の新しい箏曲界において第一線を歩んだ人物が、どのように技術を身につけ、業績を残したのかが詳らかにされた。

フロアからも指摘があったが、後世への教授や作曲に加え、巾柱の開発、楽譜の校閲も大きな遺産であるのに、現在では箏曲に携わる人々の間でもほとんど認識されていない。無数に枝分かれしている箏曲の伝承に関しては、研究者が1つ1つ丹念に掘り起こしていく作業が大切であると感じた。

そのほか、明治新曲の定義、柳川三味線の使用、巾柱の一の弦への使用、大阪放送への出演、現在の伝承について質疑があった。

今回の研究は、当時の音楽界を照らし出す貴重な研究であったと思う。また、福田氏の録音により、装飾豊かな山口作品を耳にすることもできた。演奏と研究を両輪とする今後の活躍に期待したい。

○特別企画

2. 未来に文化をつなぐための協働 ―ブータンの遊び歌ツァンモの展開―

伊野 義博 (新潟大学)

加藤 富美子 (東京音楽大学)

権藤 敦子 (広島大学)

(発表要旨)

本特別企画は、東洋音楽学会等の後援を受けて、2016年9月24・25日にブータンの首都ティンプーにて開催した日本・ブータン民俗音楽研究会主催「ブータンの宝石ツァンモ―未来につなぐ」の実施報告を趣旨とするものである。日本・ブータン民俗音楽研究会は、日本及びブータンの民俗音楽研究を推進し、その成果を両国の学校や社会における文化継承に生かしていくことを目的に設立され、ブータンでは遊び歌ツァンモ *tsangmo* をその主たる研究対象としてきた。

・ツァンモ研究の経緯

2010年より2015年まで5次にわたりパロ、プナカ、トンサ、タシガン、メラ、ティンプーなどの地において行ってきたツァンモとカプシュー(メラで見られた遊び歌)の調査研究の成果を報告した。遊ぶ機会としては、かつては放牧、人の集まり(法要、正月)、作業などであったが現在では本来の機会での遊びは失われている場合が多い。ツァンモの詩文は地理、歴史、生活、信仰などを修辞法を使って表したものである。遊び方は地域ごとに多様であるが、二組の掛け合い、品物を媒介としたペアの決定や占い、一人の歌手による予言や占い、まわりうたなどの諸相が見られる。

・「ブータンの宝石ツァンモ―未来につなぐ」の概要

クンザン・ドゥルジ氏(ブータン伝統舞踊団)による基調講演、ケルキ高等学校とティンレガン・セントラル・スクールによるツァンモ大会、ペマ・ウォンディ(ゾンカ普及委員会)、ツェリン・デマ(KuzooFM パーソナリティ)、ツェワン・タシ

(パロ教員養成大学)、ガワン・ナムゲル(ケルキ高等学校教諭)の各氏ならびに日本側からの2名で行ったシンポジウムの概要について報告した。そこでは、もともと生活の中にあつたツァンモの掛け合いの様式が、ラジオや地域や学校の行事の中に取り込まれるようになったこと、ツァンモの継承が国語政策、学校教育政策、ブータンの言語事情と関わりながら、社会と学校のゆるやかな結びつきのなかで行われていることなどをあげた。

・協働の実際と意義

ツァンモ大会については、日本側からの働きかけにより学校側の伝統文化についての意識が大きく変わり、シンポジウムでは、日本側からの調査報告、ブータン側からの大学教育での実践、放送文化における新たな展開等を広く交流し合う機会をつくったことで、存続が危ぶまれている民俗音楽の継承発展に新たな光が投げかけられた。こうした協働の意義を「相互啓発」(ツァンモの文化的な重要性への気づき)、「共同研究」(文化全般の深い理解にもとづくツァンモ音楽文化研究)、「開発研究」(小中高等学校ならびに大学での伝統文化を生かした授業開発)としてまとめた。

(傍聴記：寺田 己保子)

特別企画は、本学会他の後援を受けた事業について伊野・権藤・加藤各氏からの報告であった。初めに、伊野氏より本研究の経緯について詳細が述べられ、ブータンのあそび歌ツァンモを中心とした文化継承のヒントとして「文化をつなぐための協働」の視点が示された。次に権藤氏より、「学校におけるツァンモ大会とシンポジウム(今年度の実施報告)」について、今年度実施された事業と学校教育及び社会におけるツァンモの状況について説明がなされた。ツァンモ大会では審査員を学外者に依頼し審査基準を設けていたことや、学校でツァンモについて調べる宿題が出されたこと。また、ラジオの全国放送で電話による聴取者参加型の「ツァンモの時間」が生放送されていることなど興味深い内容が報告された。最後に加藤氏より、協働の実際と

意義について相互啓発の重要性が述べられ、課題は他文化理解の難しさと継続的な協働のあり方であると結ばれた。

◆東日本支部 第94回定例研究会

時 2017年2月4日(土) 午後2時～4時

所 共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス2号館704号室
司会 土田 牧子(共立女子大学)

○研究発表

1. 能管の演奏技法における「型」の形成再考

森田 都紀(京都造形芸術大学)

(発表要旨)

本発表は、「能」で使われる「能管」の演奏技法の変容を「唱歌譜」の分析を通して明らかにし、「型」を軸とした現在の能管の音楽演出の形成された歴史的背景を検証しようとしたものである。発表では、管見に入ったなかで最古の成立である室町時代末期(文禄年間)の唱歌譜のほか、江戸時代初期(万治年間)、中期(宝永年間)、後期(寛政年間)に成立した唱歌譜と、昭和時代に成立した現行唱歌譜の、計五譜を用いて、約四百年に渡る演奏技法の変容を辿った。そして、演奏技法に型がどのように生まれたのか、型の意味するところは何か、型の形成を方向づけていたことは何だったのかということ考察した。

その結果、能管の演奏技法が確立する過程には、流儀の形成と江戸幕府の能に対する政策などが多分に関わっていたと考えられ、能を取り巻く制度が江戸時代に整えられていくなかで、演奏技法も洗練を極め、型を形成したことが推測された。また、伝承において書き記すということを重視していなかった初期においては、その旋律のエッセンスの部分が型の姿をイメージさせていたと推測されたが、江戸時代に演奏技法が整備されていくなかで伝承における

書記伝承の比重が増し、型はイメージではなく唱歌で書き表され得るものに変化していったと考えられた。そうして現行伝承においては、唱歌譜の仮名の配列はそこから立ち上がる音楽実体を強く拘束するものになっており、演者は仮名の示す枠組みを残したまま、その外郭を彩ってヴァリエーションを繰り広げることに重点を置いている。以上の型のあり方の変容の様子からは、型を軸とした能管の音楽演出のあり方自体がこんにちまでに大きく変化したことが窺える。

(傍聴記：奥山 けい子)

現行の能の笛の演奏技法は、「型」(仮名文字で表される唱歌)の組み合わせから成る旋律を、演奏者がいろいろと実演する。この技法は江戸時代中期に確立し、その背景に、流儀の成立および幕府の能楽統制策があった。江戸初期は伝承の主軸が口頭伝承にあり、旋律型の認識は演者のイメージとして存在した。しかし江戸中期以後、視覚化された旋律型が規範となって、現在に至った。森田氏は以上のように述べた。

徳川吉宗は前代将軍の能楽耽溺を是正する改革を進め、幕府が能楽諸家に提出させた書上(上申書)で一噌家も笛の起源、書・笛の伝受などに言及している。この期に笛の家が唱歌も有形の伝統と考えて仮名を確定し、それが今に継承されたことは、幕府の政策の力の大きさを示している。

なお例会参加者から「型」の語は使わない方が良いという意見があった。能・狂言で「型」は所作に関する語として通用している。発表では「旋律型」の意味で使われていた。

2. 長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について

前島 美保 (京都市立芸術大学)

(発表要旨)

阪東亀寿は明治後期の長唄の名人阪東小三郎(1846～1907)の脇を勤めた唄方で、主に明治から大正期にかけて上方歌舞伎や上方舞の地方として活躍した。今回紹介する史料はこの亀寿の自筆による唄本類 61 点で、上述の亀寿の活動も本史料を通じて初めて明らかとなってくる。史料はその形態と用途から、薄物と枕本とに大別される。薄物の唄本 55 点は芝居の舞踊(所作事)の上演時に作成されたものと考えられ、上演年月が特定できるものでは明治 20 年から大正 9 年まで、初代市川右團次や初代中村鴈治郎所演のものが目立つ。歌い分けの書き込みから、「小」は小三郎、「キ」は亀寿(きじゅ)を指すと考えられる。中には「積恋雪関の扉」(明治 37 年 12 月京都南座、中村鴈治郎一座)の浄瑠璃本もあり、これなどはしばしば指摘されてきた「大阪の囃子方といへば、一人で各種を兼ねる」(『歌舞伎図説』)を裏付ける一例と言えよう。一方、枕本形態のものは、『雑用哥集日カ恵 劇場用』、『所作日賀恵』、『地哥端哥日カ恵』、『吾妻しらべ』、『糸のしらべ』、『舞地調』の 6 冊があり、「控」とあるものは芝居、「調」とあるものは上方舞に出演した際に書きため、整理していったことが類推される。注目されるのは『雑用哥集日カ恵』で、当時上方の黒御簾で使用されていた唄を一覧することができる。その整理法も実用性に富み、興味深い。また、女役者花井梅や巽糸子の地方も勤めているほか(『所作日賀恵』、『吾妻しらべ』や『糸のしらべ』には「山村」、「ゑびらく」、「梅本」、「陸平様」の記載が散見されるなど、当時の上方芸界の交流を見て取ることもできる。これまで番付等の史料ではなかなかたどることが難しかった、近代上方の囃子方の活動範囲、曲のレパートリー、交友関係等を具体的に窺い知ることのできる本史料は、示唆に富む内容を有していると考えられる。今回は中間報告に止まったが、引き続き丹念に当該史料の調査と解

読に取り組みたい。

(傍聴記：黒川 真理恵)

明治期から大正期にかけて上方で活躍した、長唄唄方の阪東亀寿が書き記した唄本についての新出史料の紹介だった。史料は京都の古書店に出品されていたものを、前島氏が入手したものだという。唄本に記された曲数は900曲以上にのぼり、そのレパートリーは長唄、竹本、常磐津、清元、地歌、端歌と多岐に渡る。阪東亀寿という囃子方個人が残した記録としてはもとより、上方歌舞伎や上方舞の豊富な音楽文化を伝える史料としても大変貴重であると言えるだろう。阪東亀寿は、明治期の長唄の名人である阪東小三郎の脇を勤めたとのことだが、今後、小三郎と亀寿との関係性がさらに明らかになれば、史料が成立した背景が見えてくるように思われた。

質疑応答では、配川美加氏より、薄物唄本に記された芝居の上演年月と、『近代歌舞伎年表』における上演年月が一致するかという質問があり、時期にずれはあるものの全体の四分の三程度は照合することができたとの回答が得られた。

■会員の声■

○演奏会「平家物語の世界—語りの伝統を次代に」

日時：4月4日(火)18時半開演

場所：紀尾井小ホール

出演：菊央雄司、田中奈央一、日吉章吾

演奏曲：生食、横笛、奈須与市 他

入場料：2,000円（全席自由）

申し込み：紀尾井ホールチケットセンター(03-3237-0061)

<http://concert.jtcf.jp/5549>

私たちが古典で習う『平家物語』。今、その語りの伝承は断絶の危機に瀕しています。文化庁の委託事業としてその伝承に3人の若い地歌・箏曲家が取り組みました。声明と雅楽の音楽を引き継ぎ、能楽、歌舞伎、文楽、三曲など、多くのジャンルに影響を与えた平家語りの世界が、生き生きと甦ります。

(投稿者：薦田 治子)

○日本口承文芸学会 第72回研究例会ご案内

日時：3月11日(土)14:30～17:30

場所：國學院大學渋谷校舎3号館3502 演習室

実演とトーク：東京奄美サンシン会、牧岡奈美、徳原大和、里朋樹

問い合わせ先：酒井 正子 byy04730@nifty.com

♪シマグチの響きにふれてみませんか～東京での奄美シマウタ伝承

ここ数年、東京ではフロアと一体となって歌い踊る奄美島唄のミニライブが活発です。若手唄者が活躍し、見方によっては唄あしび復活ともとれる状況です。各世代の伝承者をお招きして、あらためて都市でのシマウタ伝承を、シマことばの現状ともからめながら考えます。

(投稿者：酒井 正子)

■定例研究会 発表募集 (7月・12月例会) ■

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、7月1日の例会については4月20日必着、12月2日の例会については9月20日必着で、東日本支部事務局までお申し込み下さい(tog.higashi@gmail.com あてメール添付か郵送)。

なお、メールご利用の方で、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局からの連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2017年6月5日(6月下旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152、 E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25字×8行程度(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様にとらせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

■東日本支部委員会からのお知らせ■

昨年秋の大会時の総会を経て、平成28・29年度の新しい東日本支部委員会が下記のメンバーにて発足しました。昨今の社会情勢のなか、文化の充実は大切な課題です。研究の進展や社会への発信の場としての役割を果たしていけるよう、今後2年間、東日本支部の運営に尽力して参ります。会員の皆様からの例会企画、ご意見、ご要望など、お待ちしております。

支部専用アドレス(tog.higashi@gmail.com)まで、どうぞ、お気兼ねなくお寄せください。

【支部長】野川美穂子

【支部担当理事】ギラン、マツ

【経理担当】野川美穂子、森田都紀

【ホームページ・ML管理担当】佐竹悦子

【支部だより担当】近藤静乃、倉脇雅子、田辺沙保里

【発送担当】福田千絵

【例会担当】

〈理事〉野川美穂子、ギラン、マツ

〈委員〉奥山けい子、金光真理子、ゴチェフスキ、ヘルマン、土田牧子、鳥谷部輝彦、濱崎友絵、福田裕美、伏木香織

〈参事〉木岡史明、鯨井正子、齊藤紀子、曾村みずき、田村こしき、中村ひかる、宮内基弥、村山佳寿子、吉岡美咲

■編集後記■

新たに発足した平成28・29年度の東日本支部委員会によりお届けする今号の支部だよりでは、昨年12月及び本年2月の例会に行なわれた博士論文発表・特別企画・研究発表の報告を掲載いたしました。原稿執筆にご協力下さった方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は6月下旬を予定しております。(T)

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：野川美穂子、ギラン、マツト、

近藤静乃、倉脇雅子、田辺沙保里

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com
